



さゆりっ子

No.6

文責 若林一成

「どうしたいの？」

子どもに寄り添う

今年の組体操のタイトルは「咲かせよう!伝説の花」。これを聞いたときに子どもたちはワクワク、やる気満々でいるだろうなと思いました。

このテーマはずっと年長さんたちがかわり続けてきていて、「川を見つけて、魚釣りをするの。」「いちご農園、温泉に寄って、公園で遊ぼう。」子どもたちが語り創ってきた物語がそのまま組体操で表現されます。

「自分たちで考えて、動いて、つなげていく」ことは主体的な姿を引き出していくためにはとても大切な道筋です。

「さかなつり」「いちご」「ジャブ」「おんせん」「シーソー」「ブランコ」「すべりだい」…と続く技の一つ一つは子どもたちがまず決めのポーズを考え、みんなの前で披露して、話し合っ決めていったそうです。まさに手作り感いっぱいです。

「子どもたちの発想を尊重したので隊形の変化やそれに伴う移動が複雑になっちゃいました。」と年長の先生がお話しされていましたが、子どもたちと一緒にきつとどどんクリアできていったことと思います。

当日もみんな全力で表現していました。まさに子どもたちみんなで作った作品でした。



先月の誕生日会で年少さんのお話をしました。

「4才になった…!」

このごろは

友だちの輪が広がってきています。

今までの友だちだけでなく、他のお友だちとも楽しんでいる機会が増えてきました。

お誕生日を迎えて、がんばりたいこともおかあさんといっしょにとりくんでいます。

年少になってすぐは

やりたいことがいっぱい。

思い通りにならない…どうしたらいいの?

まわりも困ってしまうような言動が見られるようになっていた。



そこで担任は、

「どうしたいの?」と本人の気持ちを確認しようと言葉がけをしてきた。

その子の思いを聞こうと努める中で、先生が具体的な行動を促す以上に

自分から少しずつお友だちを誘ったり、一緒に遊ぶお友だちが増えたりしていきました。

子どもはその場ですぐにはうまく応えられないことも多いでしょう。また、大人は相手が困っているのだから解決する方向で促さないといけないときもあるかと思えます。

でも、まわりの大人が行動の背景を推測しようとするか、しないかではその子の心に残るものはちがうと思います。「いろんなことを、いろんな人とやりたい。それもちよっぴり自分がリードしながら…」やりたい気持ちを前面に出していきながら、まだまだ自分でという気持ちが強く出て、まわりとうまくいかなくなる。そんな時に「どうしたいの？」と問いかけることです。一っともやもやが薄れていく。欲求は残るけど、リセットされる中で新たにかかわりを持つてきてきているのではないのでしょうか。

子どもの「思い」を受け止めていくことで、切り替えができ、やる気が伸びていく。まわりの大事な心掛けであると思います。

レトロな帽子（9/14）

暑い夏にはぴったりの帽子。登園してくる様子を見ていても涼し気に感じる。よく見ているとだいぶ使い込んだなというものも見受けられる。ひさしの部分が日焼けし、よれよれになっている。「きっと、お兄ちゃん、お姉ちゃんから譲り受けたんだろうな。」と容易に想像できる。運動会に向けて、年中さん、年長さんが練習をしている様子を見ていた年少さんが、お部屋に戻ると「かっこよかったね。ぼく、棒を持つのやりたい。」「バルーンにも入ってみたい。」とみんなお話し出します。大きいお兄ちゃん、お姉ちゃんと一緒に遊び、話かけられ、手をつないで歩いたりしたことが後を追いかけていく未満、年少、年中さんたちには「やってみたいこと、あこがれ」になっています。レトロな帽子にもきっといっぱいいっぱいそんな思いが詰め込まれていることだろうなと思いました。



できるって…（9/20）

よく「逆上がり、できるようになったんですよ。」とか「縄跳び、この前まで1回か2回跳べたと思っていたらもう20回くらい連続でできるようになってびっくりです。」というお話を聞きます。

この「できる」について考えるときがありました。一つの仮説があります。

- ①「できない→できる」という変化を起こすためには、これまでやったことのない仕方では体を動かさなくてはならない。
- ②そのためには、意識が、正しい仕方で体に命令を出さなければならない。
- ③しかしながら、それをやったことがない以上、意識はその動きを正しくイメージすることができない。
- ④意識が正しくできない以上、体はそれを実行できない。

もし、私たちが自分の体を完全にコントロールすることができていたら、やったことがないことはできるようになることはないという変な話になってしまいます。

この仮説は堂々巡りになってしまいます。ではどう考えたらいいのでしょうか。

人間の体は「思いがけずにできちゃう」ことがある。「できないことができるようになる」のは「意識が体に先を越される」瞬間だと考えるのだそうです。おもしろいですね。孫がピアノ発表会に向けて練習をしています。

同じところでテンポがゆっくりになったり、繰り返しができたり、できなかつたり…

でも、毎日聞いているとちよっとずつ正しく弾けるようになっていきます。

この姿を見ていると「練習しなきゃ、できるようになるわけじゃないじゃん。」と思います。

でも本人は勝手に指が動いている（意識が先にいく）という感覚になっているときもあるのです。そう言われると…と今までの経験から想像できる方もいるかと思えます。

子どもに習得を求めるなら、正しいイメージに近づき、意識していくことが「できる」には有効だと思います。いろんな見方から「できていく」過程を楽しんでいきたい。

参考文献：「体はゆく」伊藤亜紗 文藝春秋